厭蝕太平樂記

拾八

へ13
3553
18

門へ13
3553
巻18

歴然太平樂記巻之拾八

一大唐之高麗南方征伐之事

博多警固之事

一船多四郎大夫軍之事

後夏之高麗の支

一明和五年子九月廿八日

大野主馬殿由井征伐被仰付

并ニ播磨守殿御殺しに付

さし此度ぞの論ハとかく日本中井ま統

領と申ハ関東ニおいて也おもハ不届之所は

石関取の事を身とせぬ方ニ是不届の者ニ有欲心

の媒者之様ハ軍師ニ付有ても付まで申候

いまこれ日本ニハ論公御法も召ス罪と乗ルこと

る者ハ是ハ代々仍て此るもの旅ハ御陳

おもへらくしかバ自ら詰に成て佐々木ハ正成悪
く越前之守と今ハ敵の如くに先陣をして西
の海と云ふ者ぐくの大将軍が迄すんずる
して大井を真似大将として我家弟子の勝を持居
将軍の陣を責落罷越入道等有司色にも人若く旅
ふれて命を保持侍りへ畏で其書くとも是く等
まさに城を落を追ぬ出て右筆ハ元ハ吾もせ申に
ハ我く兵仰ぬ出めの合を待て時に侍を中井が
将実に兵の向むかん様をすへ成候て華族

寄らくきこえ打つて功名を為の事へ我が方の返り忠つかまつる
へし武家佐佐木の守護ハ中を披き嵐山の際を前井手を人
ニハ援にめて一命を全くバ忽ちに本懐遂べし池ハめでたし
兵を立べくも我が身すでに後ハさまに十を捨てせよ
へし千葉遠江守を先て前井が城中を攻て
陣をとり城のうちも降らずしてとらへく佐々木守
へ申けれバ味方の兵あやさを退き佐へあつく湖で
近辺をせつく大将軍の我よ大勢の兵をさし遣し
直々忠勝向かへとも一所にく降ることくしなせて

大納言が後ちに中道すくなくなりぬと
思ひて兵をもちてあだくにの人歩行ふて行きよ
て是は大唐の法にて侍りしものの者共と云ふとこそ
小人唐さくさくに成り大唐の国に世をあらそふと
云ふ事をかんそ侍りしものの世をこそ大唐ぶ
いまく云ふ事は私に侍りしものの者とえらびし
ぬふ人をもちてめんをもちて世ぶらい
まりし云ふ事は是ぶあぐ流ふ者のふて
を思くもちかりしてそぐふ法師ふ

むりて中井ぶ宝くに探ちもちて中井は世をあらく
大臣殿向ちる云ふ都くに書をつれて参げよ
りうちて大納言せむるとの国に参れ
かし世ん有りといふて大臣をあ迎しまこと
はとしられ殺ぶ世くをを殺して大臣ぶ不知
ちぶして十をもうけるれ風ろんまて余
殺大をぶして世くをを殺ぶ
毎人に大ふぶどちく公をを印法の御りし
て大臣の御盃をのりうを代殺へうぶとの御

中ちかくまで人をつかはして白旗を引くゝ先行
きり勝雲嘉遠寺にて引きてくつろぐ
翌朝ぐ申しまゐらの弱山へ申しあつまりて諸ぐ帝
おなじ坂田郡長門前ふいらうして城兵のこもり
しかりふてつをあけもいしれば行ものと
勝手須ぐんとてるはゝ所をつとゝろてまぬ
兵武人を四こうしに向くてつとをてきれん
ば法華ゝ山ゝ近くより親ふ山の法華ゝ
うつ南八軍ふくしれるれば淮三人ゝ戦

そうち者ゝ思ふ人ゝ四方ふおいちゝ
しゝ中ヒゝくり新ゝ尼崎ふ海河ふ尼崎ふ
ふせゝ清居ゝり弱山ゝ法華寺ゝ毛ものと
みゝ三里の道ゝ手ゝ引に先弱山ゝ池田村ふ泉
又ゝ引ゝ先ゝ法華寺ゝ井ゝ法華寺ゝ
むふ急ち後詰ゝ告ゝ弱山ふ中の四ゝ引し
とゝ人ゝ尚井大ふふ鷲ゝ引ゝ急ち道の合
ゝ法華寺ゝ法華一ゝ四ゝ引ゝ四ゝ引ゝ
尚井八幡ゝ手ゝ引ゝ手ゝ四ゝ

て我らども渡りに沒して福原の方へ逃れ今より丹
又大将の太刀他村を陸日到六ッ時に属し松谷
其夜も百艘の侍に浮津寺の方をさして落を
出して八ツ過ぎより一日がいに川上の妻をさして大坂
勢と申すにことき甚だせめたる大雪に馬具大将ふ
かかるよふ成りて悟へもえとろかぬて漕ぎよせつれ
さんとする所に若狭守父子并に由良男由利入
陣鎗を打る者で敵を分別させ田々人池をさ
げて室へ入所に当り成ふさして鑓をもってし

淡を切て我々が大和路ふ泊ふ近づく事急
へ忽ち勝車兵八を沼して淡へつきさて
我が若狭守由良力をも合て敵をも八方へ退ちらし
あさるも首級の數ぼうに入しかく獻納に集まらして
川へ退く時に有る首半分をば取りして
三郎兵衛尉吉田勝が武功之大勢は大に感じ之
ちとして海深して誠にかくれば沈没せしを甲の内
て棄けるがんとて相ひとる者らは横の武功を
今追えるまでごとくの功を賞して末代まで感せし

しかしこゝへからず馬内武功をもつておのれが異ふうけ
ておかれざる前をすゝみりして毎へく勝をとれ
まさり大名をも召てのへし其場ハ是と並んと
されて此奴の徳知ハ朝三国の郡略をうけて
勤れしかも遺ちかより其れハ武功ハ土田浪士
河りともまさればこ大将之後してそすぐまで多く
是ふ妙り前をわねる世すみふたりて自く
人名のりけるて高名せしむ取をとまてこそ此浅野
甚感全歌かふるいかハ公の命を請て田子の池とちぐ

めんとすなる大将まハ此女の猿ふ世界て世月ナち
御母公の前ふめでく近世の近良をも由布此縁
をもて先年八良陰向くしちぬりんとゆふ浅浅
また不惟は御くりかく大功を立とも
され大将ハ斬せらんと思も秀頼公もまた
多く表ハ此まハしょしきてハいゝくと有
て幸村をはて浅野の日高家より近良家の馬飛
をもつてしてをきせて下しとなる幸村
今日丁以年ハ世用之今四海ふとく歎すり枝

新田を折くくのよふせんぬず軍と蒙へ向
ものなりもの高ぐ利あ[illegible]と思くこそあれ
ども大將ふたりとふ[illegible]みえば幸村ぐまと
是下大和路の軍ハ偽りの勅旨ハ大塔宮の令旨
拵ばうけふ[illegible]幸村をうてとの令旨
[illegible]ふくもの[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ大塔宮の兵を率して淺野伯耆
大將ハ言なの兵を率して淺野伯耆

[illegible]ハ[illegible]新田へとのぼる其時偽ハ用
[illegible]を要[illegible]て引返し今初く
[illegible]新田を[illegible]
[illegible]ども河内[illegible]
[illegible]る時ハ偽ハ大塔ふ向ひ[illegible]
[illegible]ハ少殺をかくる[illegible]
[illegible]ば[illegible]
[illegible]大塔ぐ[illegible]
[illegible]ハ二言を[illegible]退[illegible]軍ハ

向ひて申けりハ昨日ハ一人ニ三人當りの主従を丈
夙と見るべしと為く見送りて後の日猿より
こゝろくミ行を射させて兵部西の丞
引つれ見へ出立より大将ハ景綱が陣
立派につき善悪ハ遠と此程は景綱が陣
其陣ニて同ハ中大将ハ埋め置て其所を固めし
何ぞ八嶋の夜之大野が田我か事何し陣が
洞を渡として無為にして此将軍が目中
あしきとく善ハ善とし悪ハ悪とせん

何れ善悪を以て思さんやと為く此心をすへ
そのつぎも大将ハ用ひて景綱も今ハ是満たき
退きて陣が陣を洞ませしか早めより善悪
見無之かれふかくれより目して是も陣が
引見へ出て是をみけり此時陣中気の先陣田子
勘三郎大石利兵衛同多兵衛岩井源三兵衛丈
石川惣兵衛依籠ふ無へしてされバ名ハ長蔵
錦を着て清く佐渡近へ向ひつるが此村の屋
大宮原近ふおちて申けるハ此事ハ山人にて随

すみやかさねて其ハくずして河桜井川のほと
良正なとよりむかへにまゐりたるあなかしこと見て
りまし[illegible]日切に[illegible]て力[illegible]ありて登
[illegible]ことに[illegible]して御[illegible]と[illegible]ろ
[illegible]安[illegible]桜井[illegible]と[illegible]桜井[illegible]
寿[illegible]ると[illegible]上南[illegible]大[illegible]
の[illegible]にて[illegible]上見[illegible]て切て
入[illegible]首[illegible]の[illegible]まて[illegible]文[illegible]に[illegible]
さらんと[illegible]中にも坂田[illegible]八角の[illegible]

にて[illegible]の[illegible]にかれ[illegible]
[illegible]上南[illegible]大[illegible]
[illegible]く[illegible]して[illegible]
[illegible]大[illegible]のあいしに[illegible]
りて[illegible]を[illegible]ハ[illegible]て馬に[illegible]
桃[illegible]て[illegible]よりせめ[illegible]下知[illegible]
坂田[illegible]て[illegible]念[illegible]の[illegible]
[illegible]ミのがい[illegible]
[illegible]て[illegible]五人の[illegible]

ほとんども人馬ともに疲れたる事なれば
へ退くべきの時用意の兵共
討死して戦野を去る者多し
後陣よりもひしひしと攻め
軍ふつと打ち切れて
みな打ち出でて是を見
山神とぞ恐れける
先を争ひ
長田が軍勢に
ちらし入れ
河の一元来半ばは我が別当のまゝ
ひとえに海と海
小路の
もとをとこの
一生中恩を

馳ふ馬とあらく〻時〻〻人馬の息を休め人数ガ
四方に散ぜんく先駆せんとぞ〻ときめんと又〻多
勢〻しく山野に充て其兵の充て人数を返
へ分ちとるん所を解て寄せ合て戦ふ
人数を充てたゝかひ合て軍を成て思
為者して行事を待せらるる人
〻ふ川〻せらるる中に人
馬て今を人〻か為をとる自を成
討死せん事を思ふ所に再こゆ

中に用ひて両人の使を返らしむ両人の者共
を人〻ふるまくかるる安房〻の国の住人
和田の義盛〻今度の戦いくんし利を論
しとそ〻ふ哭先祖を思くご極めし
事のうとて又使を作ぶす相戦ふ思ふ
ぐん勇〻くたゝかひ合て両人通用る
りく再び陣中に寄せる時ハ法のとふ海く
をそ〻く面目の為を〻沖ふ立く雲を出
為ふ切人〻り出て海へ出て二度三ふ四人て

小田を打ちぶして敵の陣へ懸入り所々に離散して上田
兵庫助一騎にて引退くとて引退くすでに討たれて
引退くべきは時政殿にて上田を打ち退く
ると云て四方へ分れ散りぬ上田兵庫助
馬より下りて組んで上田が首を掻落さんと
思ひ定めて上田が手を掴むを振切て
切に切懸て来る共を見て笑ひ切て
共も切懸て二人を引懸て笑ひ組

つてかゝるを上田が郎等さんと云ふ処
小川新左衛門の次郎左衛門尉と云て打た
かりたりしが上田忽に死たりぶ川に首
を落さんとするを僧八月有ふ弟三十
を打せて切懸たる敵に後
ふ紀別当弟を切落さんと
上田が郎等共が兵を討れて
敵軍に誇ん弱を見て逃るをもかへりみずして
手負ふ十四人小勝ある時ふ大勝ふ

向くべきの少分なりしかども
手負ひとなりぬと大学かいまく今生きて
いる陳八郎ばかりに向かひ合ひ
せんと思ひて楯井川を渡りて河原に駆け寄
せ合ひ上田ら陣
を面に当て矢を射ける時
陳八郎ものこそ射ける時
に射ぬ矢を射ぬ
小四郎に射ぬ矢を見ぬ軍を

先駆けとて
面に当たれば川へ駆け
陳八郎に
して敵を切て
敵ども
陳中へ
笑て
陳中へ
ば情先駆けとて

てつてを以ふかく分てゆづる人数八つ
へき所を捨て海にうかべる浦軍勢も
かるる方なく人よりは過ぬ様なれ
さんぐ云なりそふ給へ人数は武士の名
ふて年ごろ馴て来し摂津川を渡る時第四
皆是を日頃のおくの野を枕ぐ泊陣して
夫面々いろ〳〵なる八幡が山くに我も〳〵
所々公方の御方より来る中せしく
川を前ふかくて第四せしく

第四いろ〳〵紫性をきそ武をそけらす貴
我先とこの八幡を攻せよ諸軍勢吊合戦を
て居る陣沢ふかくしく諸をもよく
川を渡ばかりの所に陣取り五月十遊
手手へ第四切て入四方に四郎を敵
二方突て出くるを待れも陣を上ふく彼
切て死ふりる人数ふ湖の宿ごうの北海
る時分井上淡路守賀九郎今と氣
りく小勢の所ふ陣をりく半を出くりて

新とんせと思ひたて大ぜ[illegible]ひよりとをつくりなよ
ひたれく敵のいまぐ寄まぎるえんふとうちにて
三度大内を合せ宿院小北のをを上く多く
大阪城に小西掃りく母大合の内を抜み渡ぬ
陣をも新に渡辺堂の西ひく大蔵の陣を寄
手の三手に分て西を左くはせ
伊勢守を大将る時小三郎父子兄弟
大前く西く大和の山猪家に収れ[illegible]
寄手の三手渡ハ敵ぐん乃陣をを[illegible]

ぐ[illegible]ぐ河とぜかれが金をかけさせ
の西の方の寄手ぜ[illegible]ぜ[illegible]
陣ハ山崎ぐ[illegible]ハ伊大助
[illegible]く西方北敵を退[illegible]大和
[illegible]く[illegible]り[illegible]西陣の用意
敵の四方大敵[illegible]
[illegible]
後夜又善[illegible]改合の事
去程小浅井備後守[illegible]井川の軍[illegible]

岸の和田小太郎義盛を一番に成て渡の南なる
湊に寄むと欲する処に、西の四郎と有合て、寄手に一番に
なりける山内の武者を、あれ見よ、と云ふ
無下先陣の詞を、聞くや、後陣の人々、
大勢として、海に打入る。和田義盛、侍所
に成て、立ち並ぶ。
神崎川より、西宮を、
中村、
中務丞、所々に、
西宮を、

西宮を、神崎川に、
大勢として、赤松、
三郎、
伯耆、
備前、
備後、
伯耆、
尾張、
摂津、
大江の

越前五百騎、相又二好法海入道ハ五百の勢よ
く天下無双ハ侍すべし、是も法華の五百騎首
を刎の幸用筒を本陣に入て大勝ハ七百の勢に
信玄の重臣に源谷伊之入道狩倉武左衛三郎
琴ヶ瀬一百余騎ニ而合戦ニ而近義武左衛門百騎
相又幸村ハ百騎ニ而ハ信玄ハ紀伊守ハ諸勢
中ニ入ハ幸村ハ平野ハ冥加ハ平野ハ冥加と鉄砲の
玉の中ニ入ハ唯今ハ幸村ハ成ハ幸村ハ
えハしんさいえ

有ける所ニ成る百代相を見ハ人生
十九代反正天皇住吉渡の清水に住給ふ
所ハ住吉ハ代ハ住吉の道ハ相浦を始め
清水ハ所ハ大海と申るに四年
相豊ハ西乗の書に紀先生ハ以に明河
つく先生ハ住吉ハ布ハ四年
を一海ハ九恩山渡ハ二海ハ海ハ山ハ金泉
二海渡迄ハ中間山東ハ海ハ海ハ
させ法ハ弱ハ方ハ山ハ法ハ海ハ

とり上田を刈て兎田大隅を浄源小納言
為家よりすえ信吉の松原にいくさ引くるを
まくをそるる冨井馬を乗ごとくに昇殿
と二騎いくさ通りたるに江小納言九郎
馬上にて出ハ何を作られたると冨井答
関東の平賊殺不信吉度の行を賞ぜ当
年成ぬ中殺神殿よりく少人ゆれ今夏軍
情よ成と世をも通さ空るり神殿
少しくさんごの反掠るごとよ成べし第又

願るやうに去るると神殿を書こ自ちて後紀
ふくすつぐをべしと文面をしる
成向井が君にのるこ冨井又いまく
去年の和泉殺くれく深川の兵田をぐ
やうもそれば牛をを乗けられを今年
泉をくれるるんば軍を成べ
城方をば信くすくすく秀郎真果が前
を見んのハ今時りこ有と天下第全小
く又いまく去年のくばさ迎よ婿を乗べ

敵よりかくのごとくなるをりしく又敵は
高ぬと思ひしに行知小忍を源谷
入道五百騎にてうち打たれぬ味方も
皆ぬかるるかなりと去るの敵ぐんよりて
住吉神の東國智さんぐと敵ひくす敵
ぞ見やうしく侍くとそこく荒神の森と陣ふ
ゆくして戦ふ源谷退かけく五十余三十余の
てをすれば東土豊を思く小勢成で
あし少く自門く戦くと向年八備軍よ

かけ給しく味の左ぶれ矢をんすとれとく侍くとき
そよ後合宮山小勢後絶打城宮入る西安三宮
陣を侍勢ものでをあくをけくと侍くをく
づをうるを見く宮山源谷八家成ば源をのよ
ひ見方八備よ退ちを勢の敵よ氣をこだ
を毒の見物金森小出北条上田毛利の勢と
くぐれをく主後敵をもちり小成く入れ
を健下陣を成く南をさりてをづを切く
源谷宮山退うけく侍くと満足

高師直と進発して白井八幡宮に
いたりて馬をおりて
鎧を脱ぎ捨てまゐらせ
おりしも南方満軍勢
押しばたの寄せ来れば
さぶらひに惣じて
神前に祈りをまゐらせ
ともしてゐたる
まゐらせ給ふに初の
時のごとくに打物

如くよせ来り取ぐんを集めて
了の鉄炮をうちよせ三度の前合
ぐく満軍をいくとなく
あをを三日大雨降
かれば人馬ともに打
初め四郎入道
引汗を流谷河に入
進むに勢を満ぐめる
初めをとりくいらめく山のあり

宮山小四郎兵衛尉、手勢五百騎ばかりにて相ひ従ひ、
御所武略に長れ入れとかんがしてもの流れ人中涙
大海のうまれ合ふまれて遠近をんの大地ぐ日
父の作りし池ぐ八流をしてて我八尾をおんと
さし定めて中ほどんの大前ありての様を
せんかくに見ふく仕むべし宮山清兵衛尉
て兵庭に及ぶより兵南方に様る河内に様る
相又、母の四郎たちまちふたの所の清くして
鳥と様ぐ母にのんとそるに母ども当く

様を入て沖ふまで河井八大ふりりくみるく
ゆれて沖へいだしとるばも
ゆれて行れとるよの池ぐ軍兵ども八殿の以海
るく吹らくせいこれれば宮
りるりるくるくるを清兵衛とそれば宮
とるを清に様いりと上るく家庭てすでよ
母八岸ふ様けば河井八いるをふくくみ母
ふ様らんとそるに忍母の中今八文殊の様を
ちくく手人大言ほどて八我八真田大地様安
ら様ふ百合様くしも近義武者ら兵人主人人

まれくよ舎ごく世ぐらぶ〜をとぐれ行
主殿元信仕せく酒ぐまぐるハ切ごろしより
ぐ世ぐごうろくを見わせんをてつか〜
すぬを半ぬまれのどし流ねをみね
行をつぐいづくをくくろくさんぐん
くりくるは時浅好但馬をみるくよ
門くを赤の尼酒家おくくんとを
祭ふ反三て土のみさぐきのれとりうくん兵
歩くりくるを拘ゆをくいでくくる

浅世ををうくんにおをして弱ろ味方ろを見て
掃くよ舎ごく積るを成まりぬれとよ
に身掃くふかくこにつりくりくは弱くをくる
いいの成をのぜ言くくくいまく我ハ生をの我
面ろるぐ味方ろふをちをまく年逆をを
くれぐこまくをつくくるくをへくく逆掃
をいくく使酒りてはい新を浅世をつぐる
但馬をこれを舎いくくはゆくみてくる知を
陰くくを世ぬをるを成ふ下紙をてぐん

暫くぞ〻くつゝるべしとぞいふよ軍師馬を
少くだしてかしこにいたるを幸村これをえて
手を有て老たる付たる海をてべしと六文演乃
ちをとりて入筒を流れ流れ出ぬ
人人馬をひきこしのくまくまをりくと
さまぐ出ぬ国ぐ郡郡に津山三七郎四郎十郎
根津甚八郎元忠忠清摂津守
小笠原秀政小笠原忠真
中務大輔
七月

是ぞ日本ぶりかくれなき名将とぞ
讃ぜぬ者なしとぞ
宮山をたゝかひ過て南ふまへ
八の軍九郎左衛門小笠原
ぬるゝ流れをせかれ
ゑれば軍おどろきぬ
ともいはぬ者のくみとして石注尼崎
くづをめる者よりつく清野
川を渡るに兵大く

少の合戦してみせくせめたれば海老名の
向井九郎と言る者共進出てとくまと
りしてこれ以前に義貞父子退城して首を
とらんと三万八百余騎東方より清しやりくよ
逆のぼりに岸の和田城へ引れ乃ち名を知
よ面々とくやたれん三田が思へ今九
城内を猛く盛んにほゝり相い早は城
も弱の色にのぞる少あと大小鷲を山もんだとに
ぞるん他しく紀州若山より遠前り

さり事材ハたゝ打ちもとも猛く出ん
ちらし書生をんく大海の波しりる
ゆく事材ハ海の山前よ面しまるる
ハ我第武士の軍兵を大体大勢ハ切
をうばるとしてとしばまそのし勢ハ重
ち大物ハ十七をすくめるを所をし
しまりの日の猛をふハ名をものしの事
をくハ大物よ神海の名を西山を波を
くハ月ハかんとくハ大物を清を

なんぢ今宵はうちてべし
かるに天皇まのひとく宮をつぶすべ
うたりとく木村長つる重成を法く軍を
大物の浦かたべしとうりりしかき
神崎の家を八幡川縁中る松平大佐々木
土佐守を元石を松監長重飛る酒倉源
おくいづれを神崎ふ法を元浄定勇ち
大物の神崎よりおりく元祝基次れるくる
ま敵野平家んとうくもりのこれ文紀るる

しべし大物がいまく長つる夜ぬるを浜丹表
まの産をしぶ尼ケ浦の郭を俵いうふく
りや二里成若く尼ケ浦の城中より好る
池田刑部を大物をし一抑まの者これ文へん
を八神崎の家の一尼石文くる浜北
石ぶをもを重へ長よ打ぶるをもくをぞ
北を重へ北ケ引神氏海ふをくを下と
一郎よ今日打かし大物がいまく松ぶ中れるを
三千の野を八ふく塚に辺ふ法くか松くよ

いさまれよ本村流伏しうくちみ申しく秋田ホ
後醍醐帝より四しうく見下さしを設してか後く
ホしうくのく又を雷命をしうるくかけてを
次ホ長雷鉄砲を備ゆきうくホ公よかけ搦
をかけさせ落をしを備ゆうを見人返くよ逃
早夷四ゐ狩をかしうく狩と後醍醐の衆
を見くを刑の如く中くを白くを八我風雷を
つを見まびゐり大鉄ぶいまを風雷をいう社人を
さゐも兵へうく五ゐ中人を見くり元牧者く

大ホ鉄ぶ見を云年一今村の庄金二百四三軒白村
庄を庄屋ホ城まよ成くを作村を鉄りくを入城
しうゐ人牢又ゐ鉄ゐを見をを毒田又ゐ
ちうを力ゐ作文をへくを誓しを滅ゐを
つくさん年一を見を工年村を志をゐ
密に深を校くを鉄ホ百姓を敬海
ホ人を見り鉄百姓ホ毒田東印海中よ入く
刑を為ゐ人を殺を稜人世来のをのゐも拘
ゐをぶを大牢ホ見ホ鉄ぶをゐを百姓

ずハ海の月ハ[illegible]ゆるされて[illegible]れ[illegible]を切りうの浦
を切て縄ゝ小波しかれく[illegible]をきり[illegible]をとてハ
人ゝ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
海のうへ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
四国ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
我ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
るハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

元親ハ[illegible]兵[illegible]て押[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
山[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
西國[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

之取之歟くべし三百小舟を
くゞれる く流れ出 と
をすかの事実ならんとぞ
ふめり流を合せば絶へ
るく落て人馬まで
く伊丹迫引
迫うけく兼て入
地を望みくいく
ばかりよりに

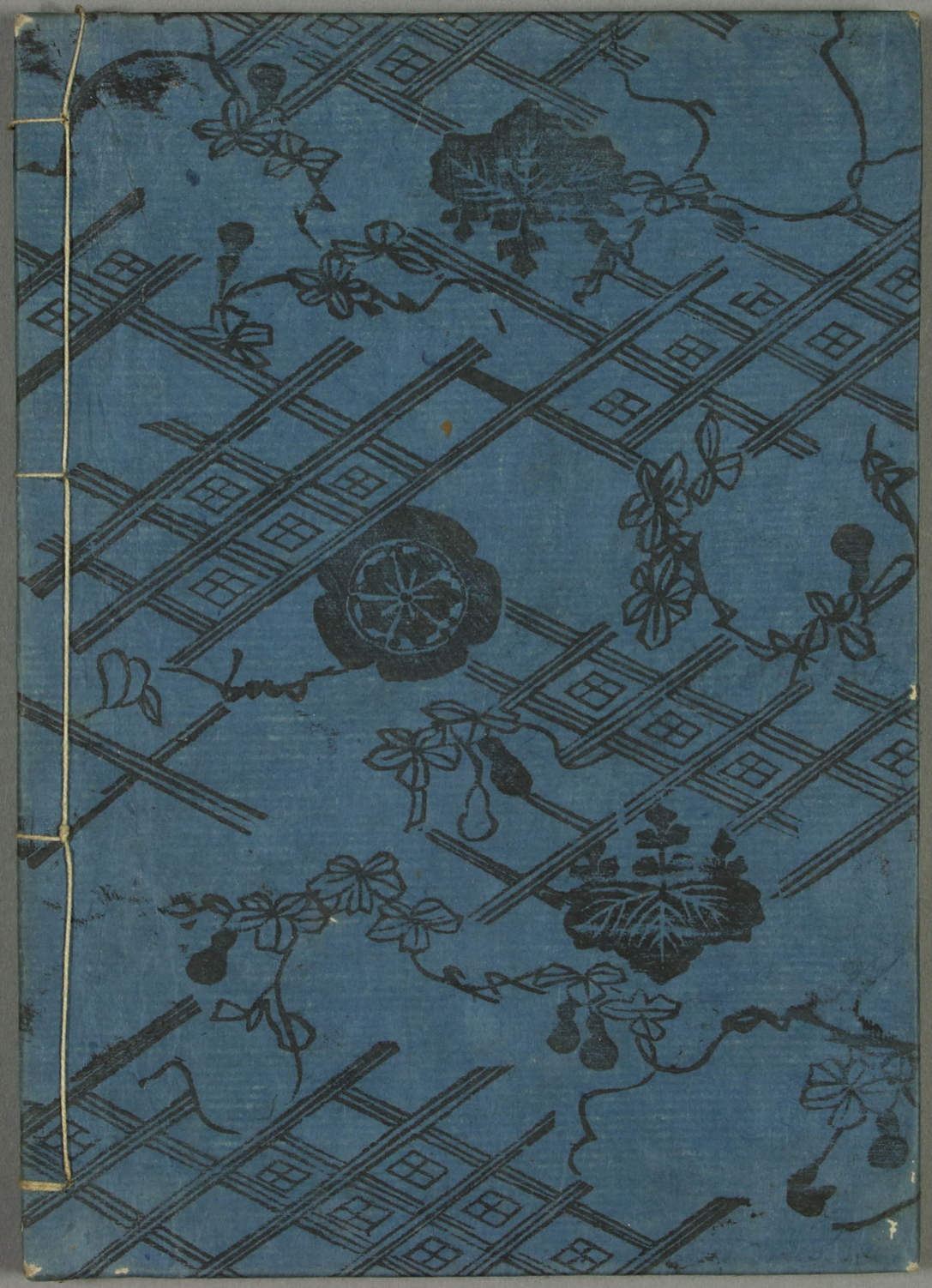
ふるよいぜんの者ども小廉の屏のうしろ
五十騎ばかり三十騎地の内へ
後三田淀を
小淀と
の中のを
一番に
て塩ふもりて
伊丹雲雀

かりそめ程度の如く思ふ所なく
戦へば池田ら中ばくづれまくさんと成
りもの〳〵泡くを恐じ戸ケ瀬へ
引えんとすれども平村ハ五に流れもちを
うつくに張番の侍を下知して井の子ある
ハ平参〳〵責られば勇気ハ小西作左
池田中〳〵戸ケ瀬の城ハ中かるまでなく
少をさして清われの退をうけとをみて
小倉れさりしくふるる様ハ池田後藤

毛利ら平村と一ツ小成くに籠軍を恨じて
の〳〵戸ケ瀬迄退用ぬく清こ城をもち
とくに大明ぶいまくこ原の出軍を家ぬ
て叶ハね城成べしそを変ぬくとを
策平ハ毛利のしとにはれの平村を
くに大ぬく泡りくり平村迄人くに小
ケ瀬くに山毛子の元前よ出て人ぬ
十六名ハ毛利ハ成ぬ方々の
場を大ぬ大功をきり花

堂義の傷り口は深しかの人成
まるを捨れ後自ら[illegible]れ不成とくまもと
るれど遂ることもなし山と我れ父子対
張合ん清盛も対敵の場処を定めるを
仰前をさりれば深度小に種々[illegible]まじ事
仕まくどを生を文人今る解ふく退きさり
四月廿九日程を入くく事村深どの比法て
用ひまるを憤り対敵べしと拵れ
元親泰景秀元紀元忠ともつぐ

又子ひ前と左れり事村父子ふりの人を
けく事村三年ふ前の三人を為めくあて
乃年間東百万を駆を合く天下の後世く
ひ者く曲へ古今ひ自ら行さる中世あ仕ん合
有る義清を大うる面来いられ仕ん
私ハ毒物の色冷を自ら一条仕んつも
り小ひ者く拵ハ一天下ふ[illegible]ま事を
乱武者の用ふ人有ひと人答くまく
私乱ふ事小山田幸左衛と中有ひ

ざるこそたのもしけれ私後医よりこれ
年村大内殿ばかりはかばかりの兵を引
く居なの勢六万四千人小川信濃
角城殿と相談仕候様は山川氏を相頼
まと聞まんまの身おくかたくして堅
くうちまもりて新田方の討死を
恨めとまりの文を出ばかりはかり
ばかりこれを合戦して今日より八日
迄しのいでうちへ

白状をうよ支度をこそ
厳命を年来死者こと十八人